

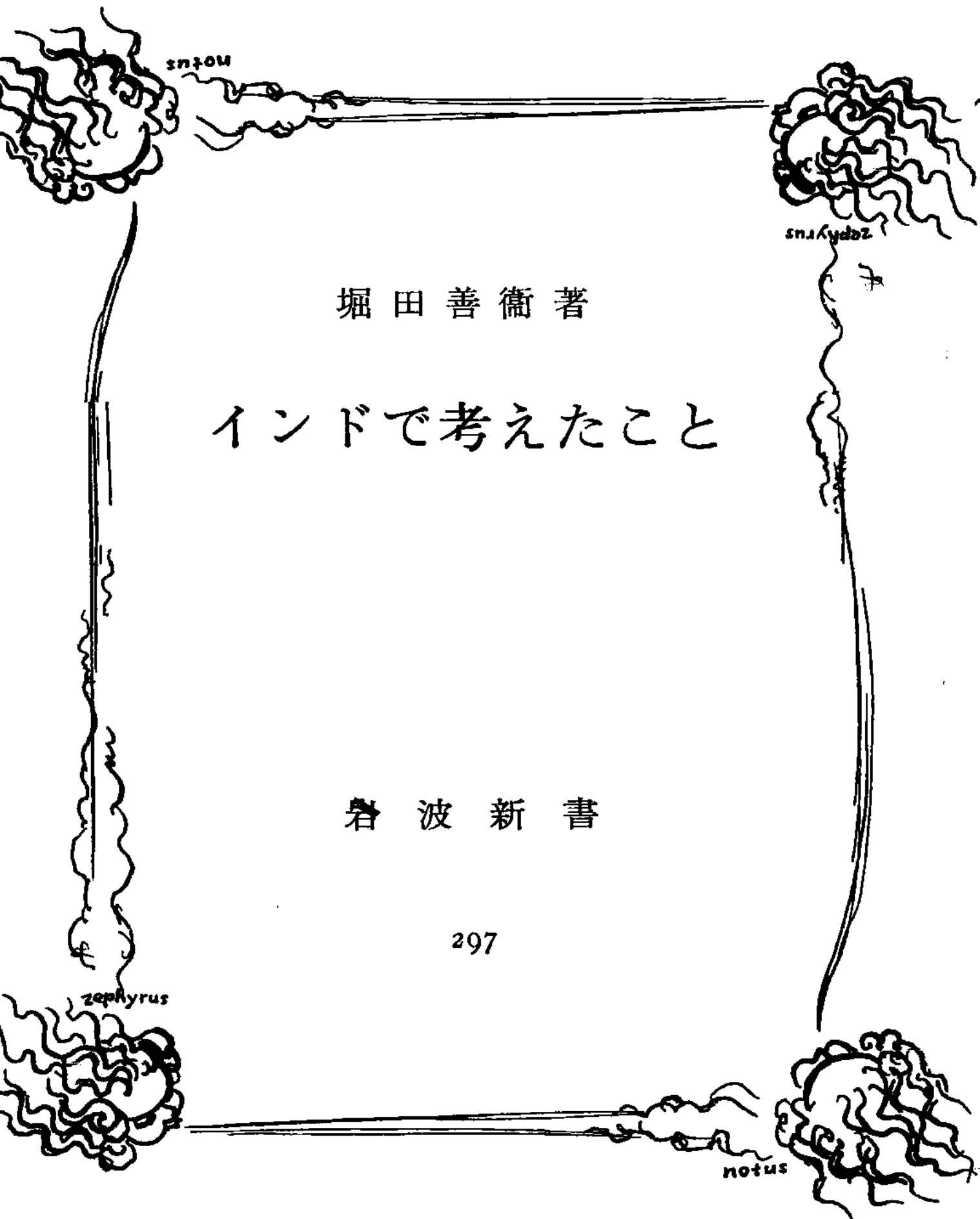
堀田善衛著

インドで考えたこと



岩波新書

F 31



堀田善衛著

インドで考えたこと

岩波新書

297

## 堀田善衛

1918年富山県に生まれる

1942年慶応義塾大学文学部卒業

専攻—小説，評論

著書—「キューバ紀行」

「スペイン断章」(以上岩波新書)

「広場の孤独」「歴史」「時間」

「海鳴りの底から」「審判」

「スフィンクス」「ゴヤ」

インドで考えたこと

岩波新書(青版) 297

1957年12月19日 第1刷発行 ©

1979年5月20日 第26刷発行

¥ 320

著 者 堀 田 善 衛

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします



輪廻の車—コナーラク寺院

(The Golden Age of Indian Art  
Vth-XIIIth Century: Pierre Rambach)



デリーの街角にて



街頭のタバコ売り



愛の群像の一部

—ヴィスヴァナート寺院—

(前頁書: Vitold de Golish)

## はじめに

地球というものは、実に実に広いものなのだろう。それは実際ひとりの人間にとっては、気の遠くなるほどに広いものであるらしい。けれども、どのくらいのパーセンテージになるものか、私にはわからないが、とにかくこの広い地球の大部分には、人間は住めない。云いかえれば、地球のなかで人間の住めるところというものは、ほんの少ししかない。

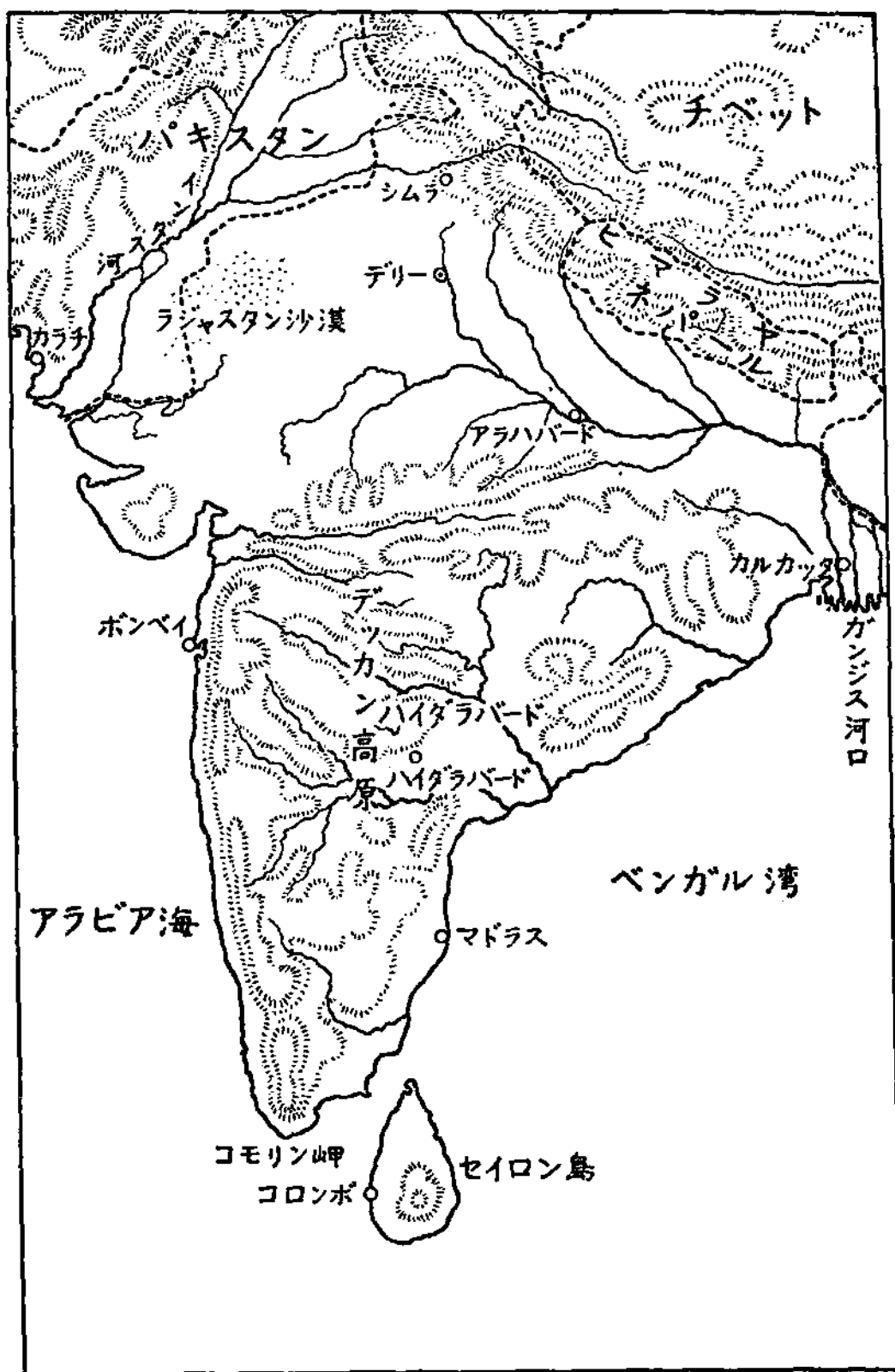
こんなことは、しかし、実は考えてみたところで仕方のないことだ。広かろうが、広すぎようが、なんとも始末におえるようなことではないじゃないか、と云われるだろうが、日々の生活の枠のなかにとじこめられて、その枠のなかでしかものごとを考えなくなるのは、仕方のないこととはいえ、人々が、この世の中について、人間について、あるいは日本、または近代日本文化のあり方などについて、新しい着想や発想をもつためには、ときどきおのおのの生活の枠をはずして、その生活の枠のなかから出来るだけ遠く出て、いわば考えてみたところで仕方

のないような、始末にもなんにもおえないようなものにぶつかってみる必要が、どうしてもある、と思われる。

この手記は、私が一九五六年の晩秋から五七年の年初にかけて、第一回アジア作家会議に出席するためにインドに滞在したその間に、インドというものにぶつかって私が感じ考え、また感じさせられ考えさせられたことを、別に脈絡をつけることなくじかに書きしるしてみたものである。スマートな旅行記といったものではなく、また理論の筋をととのえる努力もあえてしなかった。おそらく、順序もなにもないたいへんに行儀のわるいものになるだろうが、仕方がない。行儀のわるい一小説家とインド・日本・アジア、相對しての小さな對話の記としてでも読んでいただければ仕合せである。行儀のわるい思想旅行、思考旅行、抽象旅行の記であるかもしれない。

一九五七年九月

堀 田 善 衛



|   |                  |   |   |   |   |   |   |   |   |    |
|---|------------------|---|---|---|---|---|---|---|---|----|
| Ⅰ | インドへ?!           | : | : | : | : | : | : | : | : | 1  |
| Ⅱ | アジアがアジアをなんにも知らない | : | : | : | : | : | : | : | : | 16 |
| Ⅲ | 抽象的第一日           | : | : | : | : | : | : | : | : | 38 |
| Ⅳ | 日本のイメージ          | : | : | : | : | : | : | : | : | 46 |
| Ⅴ | 無慈悲な自然から思想が生れた   | : | : | : | : | : | : | : | : | 71 |
| Ⅵ | 「怪奇にして異様なるもの」    | : | : | : | : | : | : | : | : | 85 |
| Ⅶ | ことば・ことば・ことば      | : | : | : | : | : | : | : | : | 99 |



Ⅶ 山羊<sup>ゴート・プレーン</sup>の脳味噌<sup>ブレイン</sup>：：：：：127

Ⅷ 「インドは貧しい国ではない」：：：：：142

Ⅸ 修身齐家治国平天下：：：：：154

Ⅹ 連射連撃大エンゼツ会：：：：：169

Ⅺ 洞窟の思想：：：：：180

Ⅻ おれは生きたい：：：：：193



## I インドへ?!

私は戦争中から戦後にかけて二年ほど中国にいたことがある。戦後は、上海で国民党の宣伝部に留用され、つまり中国人の只中で中国人の機関で働いていたことがある。それは愉快で、同時にまた甚だにがい経験であった。一九四六年の年末に、私は帰国したのだが、この国民党の機関にいて、つくづくと政治と経済が内部から崩壊してきた場合に、いかにして革命が起るものであるか、ということを経験した。レーニンの云う「『下層』が古い方法を欲せず、しかも『上層』が古い方法でやり得なくなった場合にのみ、革命は勝利しうる」という原則が徐々に現実化して行く過程をまともに眼に見るような気持でいた。

簡単に云って、私の日本以外のアジアの土地についての経験と知識は、中国でのこうしたものの以外は、ほとんどが書物によるそれにすぎない。それで、インドへ行けということになって、私はあわてた。インドへ行くなんて、生れてこのかた考えたこともなかったのだ。それもアジ

アの十七カ国ほどの国から文学者の来る会議に出ろということであるから、なおあわててしまった。私はインドについてはいうまでもなく、ほんの少しばかり知っているらしい中国のことを除けば、アジアのいろいろな国のことなど、なんにも知りはしなかったからである。なんの予備知識もありはしないのだ。

だから——だからというのもへんはなしだが——、だから、そこで私は、やはり反省せざるをえなかった。戦争中、私のような西欧文化ファン（まあ、ファンといった程度のものであるだろう……）でさえ、痛切にアジアのことを知らねばならぬと考えて、中国語をならいはじめ、そして戦争末期に、ハシゴをはずされてもかまわぬ気持、つまり二度とふたたび日本へ帰れなくなってもかまわぬほどの思い詰めた気持をもって中国へわたった。そして中国でいろいろな目に遭い、遭わされた。

ところが、戦後にいったん日本へ帰って文学の仕事をはじめてみると、さてどういうものだろうか、私が要するにケイハクなのかもしれないが、いつのまにかヨリがもどったというか、メッキがはげて来たともいうか、あるいは戦争後の、あの一種の近代西欧に対する一辺倒とでもいうのか、あの渦まきような雰囲気にもきこまれて、いつとはなしに、結局、アジアのこととは、またまた、忘れてしまった。そして人並に、やれサルトルだ、やれ不条理だなどと——サルトルにも不条理の論にも、痛切な存在理由があるということとは、それは一応別として、で

あるが——あわてふためいてみた。そんなことではいかん、それではますますわれわれの文化創造の根は細くなるばかりだろうというようなことを主題として『断層』という小説まで書いたことのある私自身が、結局そんなことになってしまっていた。そういうていたらくだったわけである。

ということは、そんなていたらくの私が云ったのでは論理のムジューンだ、と云われるかもしれないが、ということは、せんじつめて考えてみると、近代日本人にとって、濛々として古代中世近世現代の様々な局面が霧のようにたちこめていて、また複雑多岐な鉾脈みたいに新層、旧層などのそれが重層をなしている、アジアの文化および生活様式の秩序あるいは系譜が既に処理しがたいほどのものになっていて、そこから魅力あるいは文化創造のための起動力をひき出すことが、すこぶるもって困難になっているということなのかもしれない。だから、西欧の、表面的にはとにかく一応は合理的で、理の筋の通ったものに、すぐにひっぱられて行ってしまうということになるのかもしれない。

大ざっぱにひっくりくるめて云えば、まずこんなことになるらしい反省を、旅立つに先立って、私はした。そして日本の眇たる一作家にとって、費用まるがかえの招待旅行ならばとにかく、海外旅行に出るということは、経済的にもたいへんなことである。作家会議の書記局員として、また日本代表をかねてこの旅行をするについて、私は物心ともにずいぶん無理をした。費用に

ついては自分自身の用意とともに、先輩作家やいろいろな団体の合力をえたが、そしてそういう合力が可能であるという点にも、実は日本の特質があるということに、私はアジアのいろいろな作家たちに会うまで気がつかなかった。この旅行は、私にとってひょっとするとアジアにおける日本の特殊性について考えるための旅行であったかもしれない。出発前に、無理をかさねたので、私ははなはだ頼りない気持になり、この分ではインドで病気になるかもしれない、と思っていたが、案の定、私はデリーとボンベイで、短時日ではあったが、二度まで寝込んでしまった。



ところで、地球というものは、バカに広いものらしいが、人間の住めるところというものは、ほんの少ししかないんだな、とつくづく思ったのは、朝の三時頃にマニラを出て、南シナ海をつつ切ってヴェトナム、カンボディア、タイのジャングルの上を飛んでいたときのことであった。もちろんジャングルばかりではなく、メコン河の流れているカンボディア平原は、物凄くばかりに広い水田らしく、村落のようなものも見えないではないのだが、それでも、少し高いところや湿地のようなところには人は住めない。いまメコン河のことをいったが、このあたり

には、曲りくねった大河がいくつもある。ビルマには、イラワジ河という大きな河があって、これが好き放題の乱暴な流れ方をしている。私は揚子江のすさまじさを知っているつもりであるけれども、人間の経験というものは、時間の侵蝕に対してはそれほど強い抵抗力をもつものではないということを知らされた。ビルマの平ったい部分は、イラワジ河で水びたしであった。いくつにも分れてまるで流れ放題、どんなもんだい、おれはこんな工合にも曲れる、つまり河の流れ方の曲芸というものがもしあるならば、その曲芸のありったけをやってみせてくれるみたいである。私の飛んでいるとき、季節は乾期<sup>ドライ</sup>である。これが雨期<sup>ウェット</sup>にでもなったら、いたいということに相成るか。日本の河というものも、ときどき暴れ河と化して、大いに威力を示してくれるけれども、メコン河やイラワジ河にくらべたら、河は既にほぼ完全に人間の統制に服していると思われる。

大体、私たちの河というものについての考え、これは河床のことを勘定にいれて考えるならば、その断面はほぼ英語のUの字型のものであるだろうと思う。堤防が、あたりの地面の高さよりも一段と高くなっている筈である。ところがこのあたり、東南アジアからインドにかけての河は、大体において、乾期であるにも拘らず、水面と地面とがほとんど同一の平面にある。あの分では、恐らく洪水ということは、特殊な事件ではなくて、普通あたりまえのことということになるだろう。

しかもこの恐ろしい河、濁った河が生命のみなもとなわけである。バンコック郊外の飛行場から市街へまで行く道すがら、水浴をしている婦人を見たが、着物をきたままで水の中に入り、濡れた着物と乾いた着物をきかえるについて、決してハダカになどならないで、まことに器用に、こちょこちょとばかりきかえる。そしてこの河が、一切の用をたしているわけである。この河で、身体を洗い、汚物を捨て、かつ口をすすぐ。だから、ここで人は、先ず第一に、たとえば清潔という概念についての考えを切りかえさせられる。自然についての考え方も、特に日本人は急角度に切りかえなければなくなる。従って自然観、世界観、あるいは人間観、そういうものも変化変質を強いられる。一切が自然のままの自然、人間の統制にほとんどまったく服していない自然のなかに、人間は投げ出されているということに、いやでも気がつくという次第になる。

私は、メコン河、イラワジ河を上空から眺めただけでびっくりしてしまった。がしかし、そのくらいのことでおどろいていたのでは、実にまったくお話にならないのであった。飛行機が紫色の夕空を飛んでベンガル湾に出、インドの亜大陸サブ・コンチネントに入ったとき、メコン河にもイラワジ河にも劣るまじと思われる大河が、次から次へと、五分おきほどに、矢鱈無性にたくさん出てくるのである。まったく呆れてしまった。

ステュワーデスに、

「この河はなんという名だ？」

と聞くと、

「ガンジス河」

と云う。

その次に、

「これは？」

「ガンジス河」

「今度のは？」

「ガンジス河」

要するに、どれもこれもみなガンジス河、というわけである。

ベンガル湾の奥の方ゼンたいが、つまり河なのである。だから、ベンガル地方は、水に浮かんでゐるようなものである。島なのか、大陸なのか見当もつかない。地図を見ると、この広大な河口地帯は、ざっと三五〇キロほどあつて、「ガンジス河及びブラマプトラ河河口」ということになつてゐる。そのうちの大河だけを並べたててみよう。東端からナグナ河、テツリア河、ラブナーバード河、ハリンガータ河、バーンラ河、プスル河、クンガ河、マールンチャ河、ライマンガル河、グァースバ河（以上は東パキスタンに属する）、マートラ河、ジャーミラ河、サ